

近現代日本における偽作史書とその受容を考えるために

——藤原明氏の近業に接して

書評

藤原明 『日本の偽書』(河出書房新社、二〇一九年)

藤原明 『偽書』『東日流外三郡誌』の亡霊——荒吐の呪縛』
あらはばき

(河出書房新社、二〇一九年)

藤原明 『幻影の偽書』『竹内文献』と竹内巨磨——超国家主義の妖怪』

(河出書房新社、二〇二〇年)

長谷川 亮 一

馬部隆弘 『椿井文書』(中公新書)の書評を探していて、
さる著名な日本近世史研究者による、次のような評が眼に
止まった。

「偽物にも比較的「無害な」ものと有害なものがある。

例えば「東日流外三郡誌」や「竹内文献」は偽作と本書は
いうが、これら近現代にひろまった「超古代史」モノは実
害が少ない。歴史学者もちゃんと「作品だ」とわかっ
て相手にせず、行政も教育や観光誘致に利用しないからで

近現代日本における偽作史書とその受容を考えるために（長谷川）

ある。（磯田道史「見抜けなかった失敗から何を学ぶか」『毎日新聞』二〇二〇年四月二五日付朝刊一七面）

一見偽物だと気づかれにくい『椿井文書』が、行政や教育に利用されるなどの混乱をもたらしている、というのはその通りである。しかし、『東日流外三郡誌』（以下『三郡誌』）は、当初は近世に編纂された地誌として、自治体史の「資料編」という形で公刊され、長年にわたり東北地方の地域史研究を混乱させ、その影響は今日に至るまで残り続けている。決して「比較的無害」どころの話ではない。荒唐無稽な『竹内文獻』にしたところで、たとえば、そこから派生した「キリストの墓」や「モーゼの墓」は、現在も観光地として整備されているのである。

そもそも偽書についていえば、偽書としての巧拙や内容の派手さ、荒唐無稽さなどは、その社会的・文化的な影響力とは必ずしも相関しない。稚拙なニセモノが行政や教育に悪影響を与えてしまうことは起こりうるし、現実にも起こっている。

さて、ここでいう「超古代史」は「古史古伝」などとも呼ばれるが、おおざっぱに言えば、『古事記』『日本書紀』に記録されなかったそれ以前の「伝承」、神武天皇以前の「歴史」などに関する記述を含む一連の偽書群であり、具体的には『秀真伝』、『上記』、『宮下文獻』、『竹内文獻』、『安部文獻』

『九鬼文獻』『三郡誌』などが挙げられる。また、その多くは、漢字渡来以前に日本で用いられていた固有の文字（として近世に偽作された）「神代文字」に関する記述を含んでおり、一部は神代文字で書かれている。そして、その多くが、昭和初期に超国家主義者らによって、日本の真の古代史を伝える文獻として宣揚され、さらにまた、一九七〇年代以後の古代史ブームやオカルトブームなどの中で注目を集めてきた。

これらの偽書群についてノンフィクションライターの藤原明氏（以下「著者」と表記）が全般的に論じた著書『日本の偽書』（文春新書、二〇〇四年）が、二〇一九年五月に河出文庫より、「文庫版あとがき」を付して再刊された。同書は、『上記』『竹内文獻』『三郡誌』『秀真伝』の四つを取り上げ、さらに、これら偽書群の生成メカニズムを考える上の材料として、平安初期に成立した偽書『先代旧事本紀』（以下『旧事紀』）と、近世におけるその派生本『先代旧事本紀大成経』（以下『大成経』）についても扱ったものである。また著者は、これらのうち『三郡誌』について論じた『偽書『東日流外三郡誌』の亡霊』を二〇一九年一月に、『竹内文獻』について論じた『幻影の偽書『竹内文獻』と竹内巨磨』を二〇二〇年一月に、いずれも河出書房新社より上梓している。『竹内文獻』も『三郡誌』も、いずれ

もすでに多くの言及がなされてきた書物であるが、著者は決して屋上屋を架すことなく、先行研究を批判して新たな研究視角を提供している。なお、『偽書』『東日流外三郡誌』の亡霊」と『幻影の偽書』『竹内文獻』と『竹内巨磨』は『日本の偽書』が前提になった内容であり、また『日本の偽書』で不十分だった点やその後明らかになった点を後二書が補っている、という関係なので、参照する際は三冊を合わせて参照することをお勧めする。

前置きが長くなったが、以下、この三冊を取り上げて論じることにした。

ところで、こうした偽書群は、どのように呼んだらよいのだろうか？

今日、これらは「古史古伝」と総称されることが多いが、この呼称はもともと、神代文字等のアマチュア研究者であった吾郷清彦が、『古事記以前の書』（一九七二年）や『日本超古代秘史資料』（一九七六年）などにおいて、『九鬼文獻』『竹内文獻』『宮下文獻』等を「古史」、『上記』『秀真伝』等を「古伝」と呼び、その後、作家の佐治芳彦が、『謎の竹内文書』（一九七九年）以下一連の著作で、吾郷の用語を援用して「古史古伝」という呼称を用いはじめ、定着するに至ったものである〔原田二〇二〇：七二〜八〇〕。す

なわち、信奉者の立場からの呼称である上に定義もあいまいで、学術用語として使いにくい。

著者がかつて、これら偽書群の総称として「近代偽撰国史」という呼称を提案した〔藤原二〇〇四、同二〇一九a：一八〇〕。評者（長谷川）は以前、「古史古伝」に代えてこの呼称が使えないかと考えたが、「近代」「国史」という表現に引っかけかりを覚えて使用を断念し、その際の疑問点について「成立（偽作）時期が近世に遡るものや一九七〇年代以降まで下るものまで含まれており、「近代」という呼称は適切さを描き、また、必ずしも史書として書かれているとも限らず、「国史」という呼称にも難点がある」と記したことがある〔長谷川二〇一七：一四六〕。このたび、この点について著者より『日本の偽書』の「文庫版あとがき」〔藤原二〇一九a：一八八〜一九〇〕および『偽書』『東日流外三郡誌』の亡霊〔藤原二〇一九b：八九〜九〇〕で応答をいただいたので、まず、その点に触れることにしたい。

「近代」について、著者は「近代の偽書を近代に台頭した偽書としてとらえ、その成立（偽作）時期よりも、それが主として享受された時代に着目する」とし、その上で「偽撰」の呼称をも用いたのは、成立（偽作）を近代に限定したとの誤解を呼ぶものであった」として「近代偽撰国

近現代日本における偽作史書とその受容を考えるために（長谷川）

史」の呼称を撤回し、「他に適切な呼称が見出されるまでは、「近代の偽書」ないしは「近代の偽国史」等と便宜称することとしたい」としている。「藤原二〇一九a・一八九〇」（なお、『日本の偽書』内では「偽書」記紀以前の書）「藤原二〇一九a・二三」という表現。

成立ではなく受容の時期に着目する、というのは一つの見識として理解できるのであるが、この場合、一度忘却され「昭和一〇年代の国家主義の高揚期にもその存在は知られることなく」「藤原二〇一九a・一三」、戦後になって「再発見」された『秀真伝』や、『市浦村史資料編』（一九七五～七七七年）として公刊されたことで広まった『三郡誌』には、うまく当てはまらない。著者は、『三郡誌』の原型の偽作開始時期は一九四一年まで遡る。「藤原二〇一九b・第三章」とし、「近代」は一九四五年以前のことであるから「近代」の呼称を用いても差し支えない、としている。しかし、それが『三郡誌』という形を整えて広く知られるようになったのが一九七〇年代以降であることは動かしようがないのだから、著者が主張する「享受された時代に着目する」という見地からは、やはり問題があるのではないか。「近現代」とするか、あるいはせめて、「近代」に「現代」も含む、とした方が良いのではないかと思う。

なお、評者の旧稿では指摘しそびれたが、「国史」は「一

国の歴史」ないし「自国の歴史」という意味であり、その自国中心主義的な意味合いを考えれば、分析用語として用いるのは適切でない。

とはいうものの、それではこれらの偽書群をどう呼んだらいいのか、評者自身にも何か妙案があるわけではない。評者は旧稿において、これらの多くが神代文字に関する伝承を含むか、あるいは神代文字で書かれていることから、なかば苦しまぎれに「神代文字文献」と呼んだことがあるが「長谷川二〇一七・二五」、これについては著者から『但馬国司文書』等神代文字に触れない偽書も「近代偽撰国史」と仮称した一群と系統的に無関係のものではなく、これらを包摂した呼称が必要と考える。「藤原二〇一九a・一九〇」という批判をいただいた。確かに、神代文字で書かれていることが前提であるかのような呼称を用いることは不適切であった。原田実氏のように、「古史古伝」という呼称の問題点を認めつつも、すでに定着してしまっていることから再定義した上で用いる「原田二〇二〇・七九～八〇」というのも一案ではあるが、なお熟考を待ちたいと思う。

また、これらが「記紀以前の書」として受容された、という点で共通するのは確かであるが、たとえば『竹内文献』には南朝関係の偽文書が含まれ、『三郡誌』には津軽安藤

(東) 氏の歴史に関する記述が含まれるなど、個々の偽書について見た場合、必ずしも擬古代史のみを扱っているわけではない、ということにも注意する必要があるだろう。

『日本の偽書』においては、偽書生成のメカニズムとして、「言説のキャッチボール」(門屋温)——すなわち、偽作者が偽書の受容者側の言説を受け入れ、それに基づいた偽書を作り出す現象(受容者は、偽書の内容や偽作に必要な知識を自分自身が提供していることに気づかず、むしろ偽書を自説の裏付けとして受け取ってしまうことになる)——を重視している。また、『上記』(幕末成立か)の記すウガヤ王統譜(神武天皇の父神ウガヤフキアエズを、一代ではなく七二代にわたる世襲王統とする系譜)が、明治期の吉良義風『上記抄』(一八七七年)を通じて『竹内文獻』『宮下文獻』等に取り込まれた、という系譜関係は早くに藤野七穂氏が指摘したところであるが、『日本の偽書』においては(中世日本紀)に着目し、ウガヤ王統譜の原型が(中世日本紀)に基づく可能性があること、また、近世における神代文字の偽作は、『大成経』における神代文字実在論(具体的な文字が挙げられているわけではないが)の影響とみられることを指摘している。

ただ(中世日本紀)からの影響について詳論される一方、

史苑(第八一卷第二号)

従来、神代文字絡みでしばしば指摘されてきた近世国学、特に平田派との関係がほとんど論じられていないのは、疑問としたい。もとより、平田篤胤の神代文字研究は、神代文字としてすでに知られていた様々な文字を扱ったものであり、平田派による偽作などといった単純な関係ではないが、『上記』が篤胤の『古史成文』の影響を受けている「藤原二〇一九a・二三二」ことからわかるように、決して無視できるものではない。こうした点も含め、今後は、近世に於ける神代文字「創作」の課程が研究課題となってくるのではないだろうか。

『三郡誌』は、出羽土崎(現・秋田県秋田市)の浪人・秋田孝季と、その妹婿で津軽飯詰(現・青森県五所川原市飯詰)の庄屋の和田長三郎が編纂したとされるもので(ただし、紹介当初は三春藩主の秋田孝季が作者とされていた形跡があり、後付けで同字異訓の別人による著作とされた疑いが強い)、長三郎の子孫を称した和田喜八郎(一九二九〜九九)が家伝の文書として紹介し、一九七三年に『車力町史』でその一部が紹介されたのち、一九七五〜七七年に『市浦村史資料編』として公刊されたもので、秋田氏の先祖である津軽安藤(東)氏の歴史を扱ったものである。なお和田喜八郎の所蔵していた文書群は他にも多数にのぼ

近現代日本における偽作史書とその受容を考えるために（長谷川）

り、藤原氏は総称として《和田資料》と呼んでいる。「藤原二〇一九b・二二二」。一九九〇年代の真贋論争の結果、所蔵者自身が現代に偽作したものであるとする説が確定した。

『偽書《東日流外三郡誌》の亡霊』は、同書が所蔵者自身による偽作であることは当然の前提としたうえで、従来偽書説の問題点を指摘する。《和田資料》は、市浦村版『三郡誌』の公刊以前に出現したグループと、それ以後に出現したグループとで、その出来栄えに差があるのだが、従来の偽書説は出来の悪い後者を中心に扱ってきたため、「偽書としても、元は何かあったはず」という主張を完全に否定できていないという。

従来、一連の《和田資料》偽作の発端は、一九四九年の飯詰山中での「役小角墳墓」の「発掘」だとされてきたが、藤原氏は、開米智鋸「藩政前史梗概」（富士貞藏編『飯詰村史』一九五一年、所収）等に断片的に見える「中山三千坊資料」が偽作の発端であり、その出現は一九四一年にまで遡る可能性があること、「役小角墳墓」の出現も一九四九年から数年遡る可能性があることを指摘する。初期の偽作は開米や福士ら郷土史家らとの「言説のキャッチボール」によって生み出されたもので、中山修験法場の宣揚を目的として作り出されたもので、安藤（東）氏とは直接の関係はなか

った。この段階で、素性不明の神であるアラハバキが修験道と関連のある神として取り込まれたらしい。

その後、資料所蔵者のスポンサーで市浦村史編纂委員であった藤本光幸の影響を受け、安藤（東）氏の記事来歴と反体制的な歴史叙述を大きな特徴とする現行の『三郡誌』が成立し、アラハバキは「荒吐」（アラハバキをこのように表記するのは《和田資料》のみ）とされることになった。しかし、藤本は「言説のキャッチボール」の相手として十分な能力がなく、『三郡誌』には、庄司力蔵の小説『安東船』（一九六七〜六八年新聞連載、一九七四年単行本化）から「安東水軍」の設定などを盗用するなどしており、その後の《和田資料》はさらに杜撰で安易なものになっていった、というのが著者の見立てである。

以上、現地での聞き取り調査に基づく初期偽作過程の解明や、「安東水軍」のネタ元が小説『安東船』であることの特定など、紹介しきれなかった点も含め、本書の研究史上の意義は小さくない。ただし、本書の論点について理解するためには、事前に『三郡誌』についての基礎知識もつておいた方が良い。

『竹内文献』は、神道系新宗教「天津教」の教主・竹内巨麿（一八七四？〜一九六六）が、家伝の神宝として紹介

した資料の総称で、太古において天皇は全世界を統治し、モーセ、釈迦、キリストなどが天皇の教を請い来日した、といった奇怪な「歴史」が記されており、にもかかわらず、というよりそのせいで、軍人などの一部に関心を持つ者がいたことで知られる。『幻影の偽書』『竹内文獻』と竹内巨麿は、竹内の評伝の形で、偽作の過程を描こうとしたものである。

本書の重要な指摘としては、まず、従来、竹内巨麿は受動的な偽作者であって、天皇による世界統一というヴィジョンは巨麿が本来持っていたものではなく、日本にピラミッドがあると主張した酒井勝軍かつとぎら信奉者の思想を取り込むことで初めて生じたものである、とされていたのに対し、巨麿は能動的な偽作者で、世界統一のヴィジョンは巨麿自身に有していたものであり、「神々の世界巡幸などを記す気宇壮大な構想を包含する現行『竹内文獻』の誕生の上限は、大正一三年「一九二四年」前後。そして、そのテイクオフは、巨麿自身によると考えて大過ないと断定してよいと思う」〔藤原二〇二〇…三二〕とした点が挙げられる。

また、『竹内文獻』は第二次天津教事件で裁判所に押収されたまま、東京大空襲で大審院とともに焼失した、という通説についても、疑義が示されている。

ちなみに、阿部仲麻呂の子孫を自称し、モーセの日本渡

来について記した文書（『安部文獻』）を所蔵すると称していた安部正人（一八七五？～一九六九）〔藤原二〇二〇…一四〇～一四五〕について、この人物は山岡鉄舟（一八三六～一八八）の口述とされる『武士道』（一九〇二年刊）や『鉄舟隨筆』（一九〇三年刊）などを編纂・刊行しているが、これらは原稿が所在不明で、内容にも不自然な点が多々あり、安部自身による偽作である疑いが強いことを申し添えておく〔長谷川二〇一八…一三五～一四〇〕。

書き切れなかった点も多いが、はなはだ簡単ながら、以上で紹介を終えたい。正確さを重んじる著者の主張を、評者の拙い要約で損なっていないかと恐れる次第である。

いずれにせよ、偽書を史料価値なきものとして否定するだけでは、明治初年の「太平記は史学に益なし」（久米邦武くにくに）の水準から一歩も出ていないことになる。偽書を、その制作意図や制作過程に遡り、あるいは受容状況を見定め、そこから何が言えるのか、というところまで考えることこそが、現代歴史学の立場からの偽書の扱い方であろう。この三冊は、そのことを考える上で、無視できない観点を示しているものと思う。

近現代日本における偽作史書とその受容を考えるために（長谷川）

参考文献

長谷川亮一「二〇一七」「日本古代史」を語るということ

——「肇国」をめぐる「皇国史観」と「偽史」の相剋」（小

澤実編『近代日本の偽史言説——歴史語りのインテレ

クチュアル・ヒストリー』勉強出版、所収）

長谷川亮一「二〇一八」『教育勅語の戦後』（白澤社）

原田実「二〇二〇」『偽書が揺るがせた日本史』（山川出版社）

藤原明「二〇〇四」『近代の偽書——“超古代史”から「近

代偽撰国史」へ』（久野俊彦・時枝務編『偽文書学入門』

柏書房、所収）

藤原明「二〇一九 a」『日本の偽書』（河出文庫）（河出書

房新社）

藤原明「二〇一九 b」『偽書』『東日流外三郡誌』の亡霊——

——荒吐の呪縛』（河出書房新社）

藤原明「二〇二〇」『幻影の偽書』『竹内文献』と竹内巨磨

——超国家主義の妖怪』（河出書房新社）

（東邦大学薬学部非常勤講師・

本学日本学研究所研究員）